本学校園　幼小中一貫教育について

1　一貫教育主題

豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究

(1)「豊かな『社会生活』を創造する」とは

① 定義

まわりの人々や環境と共生し，お互いに磨き合い，よりよいくらしを創りあげると共に，よりよい自分を創りあげる。

現代は，社会・経済構造が急速に変化し，複雑化・多様化する社会である。そんな社会や時代の要求に応えることが教育にも求められている。テクノロジーの変化に対応し，協働的に自律的に行動できる力を，４歳児から中学３年までの11年間を通して一貫して育て，「豊かな『社会生活』を創造する」人間を育成したいと考える。

具体的には，互いに尊重し合う人間関係形成能力，基礎的・基本的な知識や技能に裏打ちされた思考力・判断力・表現力といった確かな学力，社会の諸問題に目を向け，課題に対応できる力を，子どもたちにはぐくんでいきたい。そこで，子どもたちの学びにおいて，より具現化した資質や能力などを本学校園では次のように構造化してとらえている。

②「豊かな『社会生活』を創造する」資質や能力の構造

「豊かな『社会生活』を創造する子ども」を，大地に深く根を張り，大空に向かって大きく枝葉を広げる大樹としてモデル化した（**図１**）。家庭・地域や附属学校園を土壌とし，根を下ろした種子である子どもたちは，初等部前期・初等部後期・中等部という教育ブロックを通して，年輪を増やして幹を太くしていくように，多くの資質や能力を身に付け成長していく。

本校では，資質・能力として，８つの力を示している。

知識・技能については，各教科を中心に子どもがしっかりと習得できるようにする。さらには，身に付けた知識・技能等を活用して学ぶことで，思考力・判断力・表現力を向上させていくことをねらっている。

また，人間関係力や道徳性については，思いやりをもち，他者と円滑な人間関係を構築したり，他者の意見を尊重しつつ自分の意見とのバランスを図ったりして，よりよく生きていく力をはぐくみたい。学校という組織化された集団の中ではぐくまれた人間関係力や道徳性は，将来，人と人が関わり合い豊かな

図１：一貫教育で目指す子どもの姿

社会を創るための礎になるはずである。

それとともに，追求力や企画・実行力のような，子どもたちが主体的・意欲的に取り組む力を育てることで，生活の中で見付け出した課題に対して自分の考えをもち，その解決に向けてこだわりをもって調べ行動し続けていくような子どもの姿を目指している。

学び方に関しては，子どもが自ら疑問をもち考えたり調べたりすることや，これまでに学んだことや経験したことと結び付け自分の考えをつくっていくこと，友だちと考えを伝え合い自分の考えを深めていくこと，学習を振り返り学び直す等，将来にわたって学び続けていく力や姿を育成したいと考えている。

これらの資質・能力は，互いに関連をもちながら，スパイラルに高まっていくものであると考えられる。私たちは，一人一人の子どもが８つの資質・能力を身に付けて大樹のように育ち，附属学校園を卒業した後も，身に付けた資質や能力を発揮し大きく伸びていって欲しいと願っている。そして，学校園の子どもたち全員が大樹となり，森としての学校園をつくっていくことを目指している。

⑵ 一貫教育主題を実現する柱

一貫教育の主題を実現するためには，それを支える強力な柱（エンタシス）が必要である。この柱は，学校園の運営体制や子どもと教職員の結びつきであり，また，日常に行われる保育・授業が要となっている（**図２**）。

図２：一貫教育を支える柱

「教育課程・研究」の柱では，一貫教育研究主題を受け，研究主題を，「豊かな『学び』をつくる子どもの育成」と設定している。豊かな「学び」をつくる子どもの姿は，「思いやりをもって，集団の一員であることを自覚し，知識・技能，学び方を習得し，これを活用する思考力・判断力・表現力を身に付け，課題解決を目指して，豊かなものの見方や考え方，自分自身への気付きの獲得を求めて学び続けていく姿」であると考えている。この姿を求めて，日々，保育・授業研究を行っている。

一貫教育主題	豊かな「社会生活」を創造する幼小中一貫教育の追究
研究主題	豊かな「学び」をつくる子どもの育成

「子どもの絆」の柱は，子ども同士の交流を軸にしたよりよい人間関係を形成していく試みである。「子ども支援」の柱は，附属学校園に通うすべての子どもに対して，一人一人の教育的ニーズに応じた支援を充実させることを目的として行うものである。また，「教職員の協働」の柱は，教職員の願いを集結させ，11年間を見通して子どもを育成するための意識や資質・能力を高めていく取組である。

このように，**図１**は一貫教育の目的を示しており，**図２**は一貫教育を推進していくための手段を表している。すなわち，**図１**と**図２**は表裏一体の関係にあり，一貫教育で育みたい８つの資質・能

力は，これらの「教育課程・研究」「子どもの絆」「子ども支援」「教職員の協働」の柱に支えられ，はぐくまれていくと考えている。

2　一貫教育グランドデザイン

一貫教育の主題を受け，具現化するための指針となるグランドデザインを策定した。

(1) 一貫教育のビジョン

本校の一貫教育は，大きく３つの方針により進めている（**図３**）。

一つには，系統的・継続的な指導がある。保育・教科指導や生徒指導を，幼小中11年間を見通して行うことに力を注いでいる。幼稚園から小学校，小学校から中学校への節目を重視しつつ，４・３・４教育ブロック毎に指導の重点を定めて，指導を行っている。各教育ブロックの区分けとブロックごとの方針を示す（**表１**）。

二つには，特色ある教育活動の推進がある。合同集会は，幼小中の子どもが年に２回一堂に会し，交流することにより絆を深める取組である。一方，教育課程の面では，幼稚園年長から小学校１年生をつなぐために，スタートカリキュラムを導入している。また，小学校低学年から，発達段階に応じた教科担任制の授業を行っている。子どもたちの学習への興味・関心をより喚起し，子どもたちの学びをより充実させていくことをねらっている。

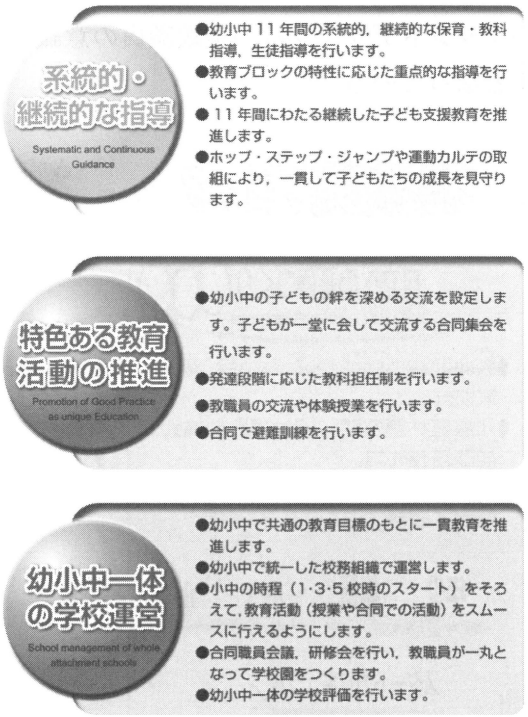


図３：一貫教育の方針

表１：教育ブロックの区分と方針

■初等部前期ブロック■	幼稚園年少（４歳児）～小学２年生
自立への基礎づくり	
・様々な体験や直接的なかかわりを通して，基本的な生活・学習習慣を身に付ける。 ・人に対する基本的信頼感を獲得し，自己の力を発揮し友だちを受け入れ自己肯定感を獲得する。 ・集団や社会のルールを守る態度など，善悪の判断や規範意識（道徳性や社会性）の基礎を身に付ける。	
■初等部後期ブロック■	小学３年生～小学５年生
集団の力を伸ばす	
・基礎･基本の定着を図り，学習に対する意欲を高める。 ・抽象的に思考することへの適応を図り，他者の視点に対する理解を深める。 ・自他の尊重の意識や他者への思いやりの気持ちをもち，集団における役割の自覚や主体的な責任感を身に付ける。	
■中等部ブロック■	小学６年生～中学３年生
自己実現をめざす	
・基礎学力を確かなものにし，自己理解を深め，自己の特性を生かした進路決定を目指す。 ・集団や社会の一員としての守るべきルールやマナーを習得し，他者と協力し，自立した生活を営む力を身に付ける。 ・人間としての生き方を踏まえ，自らの個性や適性を探求する経験を通して，自己を見つめ，自らの課題と正面から向き合い，自己理解を深める。	

三つには，幼小中一体の学校運営である。一貫教育は，幼稚園と小学校，中学校の運営体制が整い，全教職員の意識が同じ方向に向かってこそつくりあげていくことが可能となる。校務組織や時程の調整などのハードの部分の統一とともに，教職員が一枚岩となれるよう合同の会議を行ったり，大学教員と協働して研修会を営んだりして，ソフトの面も充実させている。

(2) グランドデザイン

学校運営における各柱の方策をさらに具現化したものが，グランドデザインである（**図４**）。このグランドデザインは，全教職員の意識をつなぎ，共通理解のもと共通指導をしていくためのツールとなっている。

図４：グランドデザイン

3　子どもたちの姿の変化

(1) 調査の目的

本学校園で大切にしている子どもの姿である「追求して学ぶ姿」「集団の一員としての姿」「自他を大切にする姿」についての実態を把握するために，平成20年度（以下，H20と表記）及び平成24年度（以下，H24と表記）に，質問紙調査を行った。今年度は，特に４年を経過した現在の子どもたちの姿の変化を分析し，本学校園の取組の検証を行った。

(2) 調査方法

① 調査内容

上記の目的を達成するために，全14項目からなる質問紙を作成した。質問紙では，「追求して学ぶ姿」「集団の一員としての姿」「自他を大切にする姿」の大きく三つの観点について質問している。調査項目は，H20，H24とも同一である。

調査項目（全14項目）

■追求して学ぶ姿		
FQ01	好奇心・意欲	不思議に思ったことや疑問に思ったことがあったら，すぐに調べている。
FQ02	学び合い	調べたり話し合ったりしたことをもとに，自分の考えを深めることができる。
FQ03	論理的思考	筋道を立てて，物事を考えることができる。
FQ04	興味・関心	ふだんから「不思議だな」「なぜだろう」と感じることがある。
FQ05	追求力	分からないことをそのままにせず，分かるまで努力している。
FQ06	学びをいかす	今までの学習で得たことを組み合わせながら，様々な場面でいかそうとしている。
FQ07	家庭での継続学習	その日の授業を家でもふりかえり，次の学習へとつなげようとしている。
■集団の一員としての姿		
FQ08	傾聴の姿勢	友だちの発表や意見を自分の考えと比べながら最後まで聞いている。
FQ09	受容力	自分と違う考えも大切にしている。
FQ10	あいさつ	家族や友だち，近所の人に会ったとき，あいさつをしている。
FQ11	思いやり	周りの状況やその人の立場も考えて行動している。
FQ12	共創の喜び	友だちと同じ目標に向かい，お互いが真剣に考え行動することに充実感を感じている。
■自他を大切にする姿		
FQ13	承認感	自分は周りの人から大切にされていると思う。
FQ14	自己肯定感	自分のよさを自分で知っている。

② 調査対象

調査の対象は，本学校園の全園児・児童・生徒である。但し，幼稚園は，FQ03,06,07を調査項目から外して行った。また，小学１，２年生は，FQ06を調査項目から外して行った。

園児(75)，小１(57)，小２(59)，小３(60)，小４(60)，小５(60)，小６(79)，中１(132)，中２(131)，中３(133)

（　）内は，人数

③ 調査方法　質問紙調査

・４件法：そう思う：4　どちらかといえばそう思う：3　どちらかといえばそう思わない：2　そう思わない：1

・幼稚園：教師による見取り法

・小・中学校：児童生徒による自己記入法

・H20は平成20年７月に実施。H24は，平成25年２月に実施。

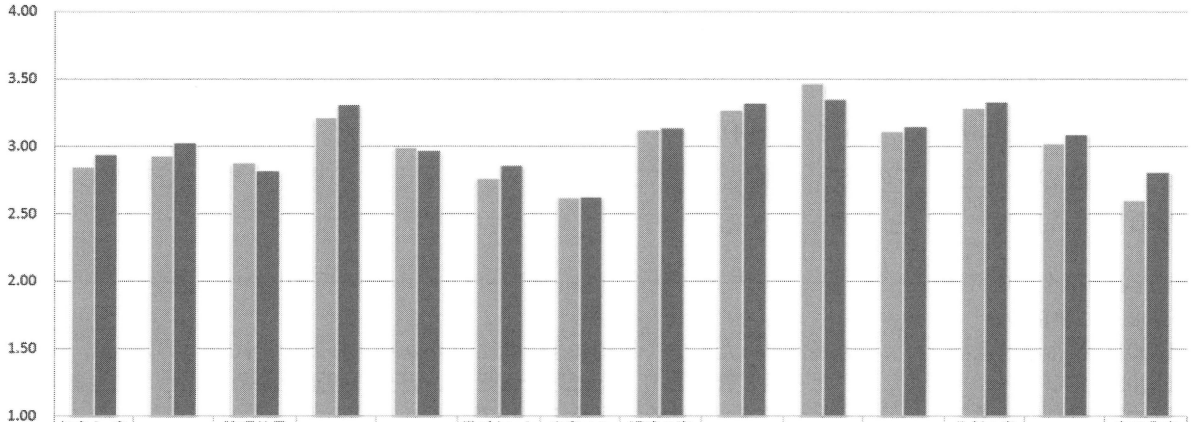
(3) 結果及び分析

① 全体の傾向

全体を概観すると，H20，H24とも同様の傾向を示している。また，全ての項目において，大きな増減は見られない（**図５**）。

「FQ06学びをいかす」「FQ07家庭での継続学習」「FQ14自己肯定感」の値は，H20には低かったため懸念されていた項目である。H24では，わずかではあるが「FQ06学びをいかす」「FQ14自己肯定感」で伸びが見られた。「FQ07家庭での継続学習」は，ほとんど変化はなかった。

他に微増であったものは，学習動機に関わりのある項目「FQ01好奇心・意欲」「FQ04興味・関心」，学び方に関する項目「FQ02学び合い」，他者との関わりに関する「FQ09受容力」「FQ12共創の喜び」，自他の尊重に関わる「FQ13承認感」であった。



	好奇心・意欲	学び合い	論理的思考	興味・関心	追求力	学びをいかす	家庭での継続学習	傾聴の姿勢	受容力	あいさつ	思いやり	共創の喜び	承認感	自己肯定感
	FQ01	FQ02	FQ03	FQ04	FQ05	FQ06	FQ07	FQ08	FQ09	FQ10	FQ11	FQ12	FQ13	FQ14
H20	2.85	2.93	2.88	3.21	2.99	2.76	2.62	3.12	3.27	3.47	3.11	3.29	3.02	2.60
H24	2.94	3.03	2.82	3.31	2.97	2.86	2.63	3.14	3.32	3.35	3.15	3.33	3.09	2.81

図５：H20 と H24 の平均値比較

② 相関関係

子どもの実態と傾向をつかむために，H24のデータをもとに相関関係をみることにした。比較的強い関係性を示している.40以上のものに着目した（**表２**）。なお，以降の分析は，小学３年生以上で行った。

表２：相関関係（H24）

	FQ01 好奇心・意欲	FQ02 学び合い	FQ03 論理的思考	FQ04 興味・関心	FQ05 追究力	FQ06 学びをいかす	FQ07 家庭での継続学習	FQ08 傾聴の姿勢	FQ09 受容力	FQ10 あいさつ	FQ11 思いやり	FQ12 共創の喜び	FQ13 承認感	FQ14 自己肯定感
FQ01好奇心・意欲	–													
FQ02学び合い	**.41**	–												
FQ03論理的思考	.39	**.47**	–											
FQ04興味・関心	.25	.18	.17	–										
FQ05追求力	**.44**	.41	**.40**	.20	–									
FQ06学びをいかす	**.43**	**.43**	**.44**	.22	**.41**	–								
FQ07家庭での継続学習	.33	.35	.29		.37	**.42**	–							
FQ08傾聴の姿勢	.31	.38	.31	.15	.30	.35	**.40**	–						
FQ09受容力	.20	.30	.32	.15	.22	.33	.27	**.40**	–					
FQ10あいさつ	.16	.23	.14	.10	.18	.24	.14	.24	.27	–				
FQ11思いやり	.18	.32	.36	.12	.29	.27	.29	.31	.36	.35	–			
FQ12共創の喜び	.27	.34	.26	.19	.31	.37	.32	.38	.35	.30	.36	–		
FQ13承認感	.25	.31	.33	.10	.28	.34	.29	.34	.33	.25	.38	**.42**	–	
FQ14自己肯定感	.28	.29	.29	.11	.28	.32	.25	.19	.20	.16	.25	.26	**.53**	–

小学3年生から中学3年生までのデータを用いて分析　太字は.40以上を示す　p<.01を表示

まず，教育研究の視点として掲げている思考力・判断力・表現力に関わる「FQ03論理的思考」を視点に関係性をみた。「FQ03論理的思考」は，「FQ02学び合い」「FQ05追求力」「FQ06学びをいかす」との間に比較的強い相関が認められた。

次に，学習意欲に関連する「FQ01好奇心・意欲」に着目してみると，「FQ03論理的思考」と同じく，「FQ02学び合い」「FQ05追求力」「FQ06学びをいかす」との間に比較的強い相関が見られた。

これらのことは，「FQ02学び合い」「FQ05追求力」「FQ06学びをいかす」が，「FQ03論理的思考」や「FQ01好奇心・意欲」に関係する重要な要素になっていることを示すものである。

一方，「FQ14自己肯定感」に着目して関係性をみると，「FQ14自己肯定感」は，「FQ13承認感」との間に比較的強い相関があった。「FQ14自己肯定感」を高く感じている子どもは，「FQ13承認感」も高く感じていることが分かった。

③ 影響関係の検討

次に，項目間の影響関係を調べるために，重回帰分析を用いて分析した。

まず，「FQ03論理的思考」に影響を及ぼしている項目として，相関が高かった「FQ02学び合い」「FQ05追求力」「FQ06学びをいかす」が想定されるため，この３項目からの影響を検討した。この結果を**図６**に示す。なお，**図６**中の単方向の矢印は，影響の方向を，また，矢印に記した数値は，回帰係数（影響の程度を示す係数）である。

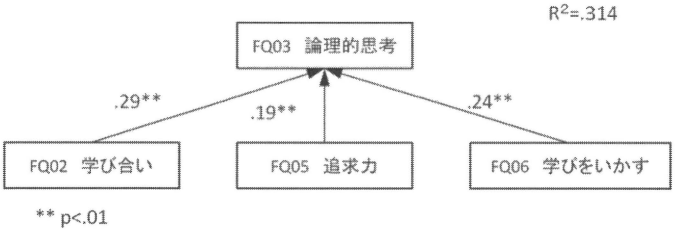


図６：「FQ03 論理的思考」への影響関係

その結果，３項目とも「FQ03論理的思考」に弱いながらも統計的に有意な影響を及ぼしていることが分かった。つまり，授業中に学び合いにより考えをしっかりと巡らせ，学んだことを実生活や他の学習に関連付けて学習している子どもは，論理的思考も高まっていると自らをとらえているといえる。本学校園で授業づくりの重点と位置付けている「学び合い」と「学びをいかす」学習を高く評価している子どもたちほど，「論理的思考」もよくできていると感じていることが推察できる。

一方，「FQ14自己肯定感」への影響をみるために，相関が.20以上の関係性があると思われる「FQ13承認感」「FQ12共創の喜び」「FQ11思いやり」「FQ09受容力」の影響度を調べた。結果を**図７**に示す。

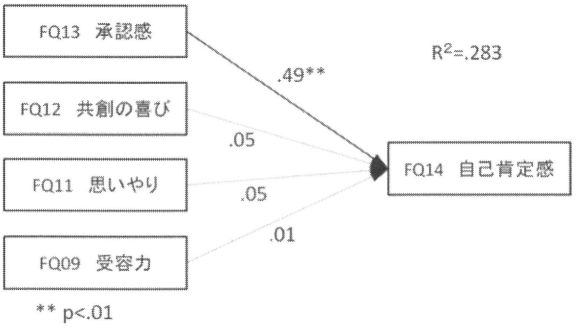


図７：「FQ14 自己肯定感」への影響関係

この結果，「FQ13承認感」が「FQ14自己肯定感」に比較的強い影響を与えていることが分かった。当然のこととはいえ，他者に認められていると感じている子どもが，自己肯定感を高めていくことができる。子ども同士で友だちのよさを認めることができる取組や教師が子ども一人一人のよさや可能性を大切にするといった，承認感を高める取組が重要であることが示唆された。

④ 中学３年生における年度別比較

最後に，本学校園の最終学年となる中学３年生における変化を調べた。

「追求して学ぶ姿」に着目してみると，H24は，H20と比較して全ての項目で伸びを示している（**図８**）。特に，顕著な伸びを示しているのが，「FQ01好奇心・意欲」「FQ06学びをいかす」「FQ02学び合い」「FQ05追求力」「FQ04興味・関心」の５項目である。学び合いを重視し，学びをいかす

ことに焦点を当てた追求力を高める授業を展開してきたことにより，学習意欲が向上してきたと推察できる。一方,「集団の一員としての姿」「自他を大切にする姿」についてである（**図９**）。「FQ14自己肯定感」「FQ11思いやり」が顕著な伸びを示した。また，「FQ13承認感」「Q12共創の喜び」も伸びを示している。

これまでの４年間に渡る一貫教育の取組が，最終学年での伸びの姿または保持している姿として表れていると考えられる。

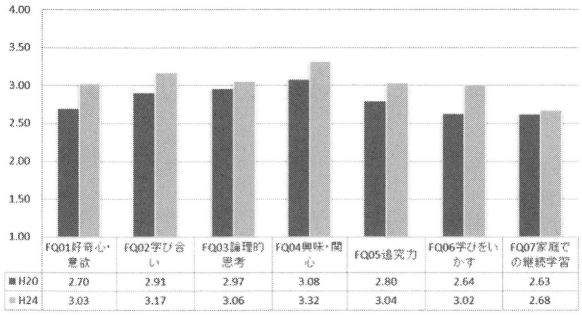


図８：「追求して学ぶ姿」

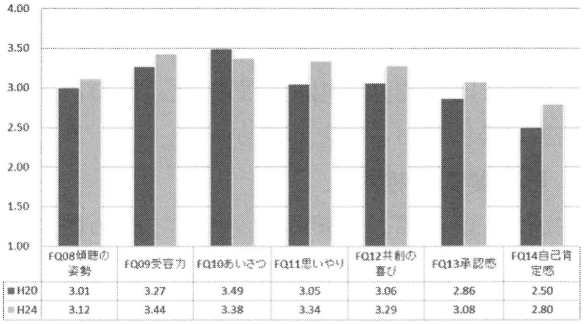


図９：「集団の一員としての姿」「自他を大切にする姿」

自己肯定感については，東京書籍が行った全国調査[1)]の結果と比較した（**図10**）。自己肯定感は一般的に，学年が上がるにつれて下がる傾向にあると言われており，全国の結果を見ると，中学２，３年生で顕著に下がっていくことが分かる。

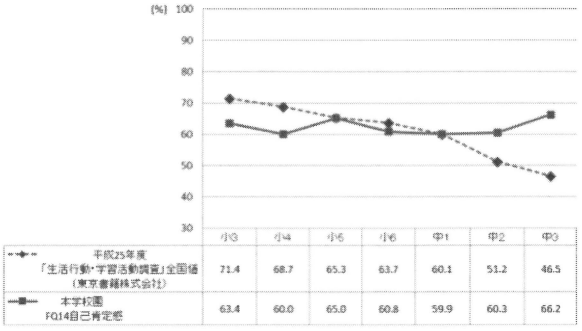


図10：自己肯定感（本学校園と全国との比較）

本学校園の状況では，小学３年生から中学３年生まで，それぞれの学年間に有意な差は認められなかった。特徴として，自己肯定感が下がることなく中学３年生まで保つことができているところが特筆すべき所である。一方，小学３，４年生で低い水準にとどまっていることがある。今後，原因を追及するとともに，全体的な底上げに力を入れていく必要がある。

(4) 結論

以上のことから，次のことが分かってきた。

1　学び合いのある授業や学びをいかす学習を構成し，追求する力をはぐくむことによって，論理的思考を伸ばすことができる。ひいては，思考力・判断力・表現力の向上につながると考えられる。

2　子どもの自己肯定感を高めていくには，子どもたちがお互いのよさを認め合えるような取組をしていくことや，教師が子ども一人一人の可能性やよさを認めて育てていくことが大切である。本学校園の子どもたちの自己肯定感は，安定しているとはいえ，低い水準の学年もある。さらに伸ばしていくための継続的な取組が必要である。

3　これまで,教科研究の重点としての「学び合い」「学びをいかす」や,人間関係性を高めるための「自己肯定感」「承認感」に関する取組を行ってきた。これらの項目の伸びや影響度から，11年間を見通して進める一貫教育の効果が見えてきた。今後も一層，子どもの伸びにつながる一貫教育の在り方を追究したい。

（文責　伊藤　英俊）

1）平成25年度「生活行動・学習活動調査」全国値，東京書籍株式会社，質問内容「自分には，良いところがあると思う」